わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

(130)

忍者、現代によみがえる。

忍者について調べている。

今年中に、「忍者ダイエット」という本を出すことになっており、その実態を探るべく調査研究に没頭している。時期的にみて、何だか夏休みの自由研究のようである。

2011年に刊行した拙著「戦国武将の健康術」のなかで、忍者の活躍に少々ページを割いた。身軽な忍者は肥満な体型では勤まらない。忍者のような生活をしていたら、おのずとダイエットにつながるはず―。こんな一文が某出版社の目に留まったらしく、今回はその部分を拡大し忍者をテーマにしたダイエット本の構想にたどり着いた。

忍者は江戸時代に上演された歌舞伎がきっかけとなって、多数のファンを得、今尚その人気を維持している。海外でも「ニンジャ」として知られ、「ゲイシャ」「フジヤマ」とともに日本文化の代表格である。

日本では、真田幸村に仕えたとされる「猿飛佐助」、テレビや映画になった「仮面の忍者赤影」、新しいところでは今年の夏に公開された実写版「忍たま乱太郎」などがあり、真面目なものからウケねらいものまで、数多くの作品がある。

しかし、その実態はいくつかの伝承も含め解明されていないことが多く、存在自体が謎めいており、私たちの興味を誘い続けている。

忍者は主に戦国時代に活躍したが、その歴史は古く、日本で最初に忍者話だったとも。

あるいは、家康の危機を救った話は実話としてもよく知られている。本能寺の変を堺で知った家康は急ぎ三河へ帰ろうとする。それを助けたのが甲賀や伊賀の武士たちで、特に伊賀武士の服部半蔵は江戸麹町に屋敷を設け、家康に重宝される。東京メトロ「半蔵門線」にその名をとどめるとは、実にあっぱれな人物であった。ちなみに甲賀の「賀」は濁らず、「か」と呼ぶらしい。

伊賀で生まれた松尾芭蕉は、実は忍者だった、との説も根強く伝えられている。生誕地もさることながら、旅の名目で全国を行脚していたことがその背景にある。旅とは表向きの理由で、本当の目的は、情報収集と当時絶大な力を持っていた伊達藩の探索であったといわれる。奥の細道の冒頭にある「…もゝ引の破をつゞり、笠の緒付かえて、三里に灸するより、…」は人生を旅になぞらえた内容だが、この「三里」は、足のむくみ解消や健胃のツボを指す。忍者は古くからツボや経絡に通じていたといわれ、三里にお灸とは、これまたいかにも忍者の振る舞いと映る。

歴史は謎だらけの楽しいおもちゃ箱のようなもの。人間の知的欲求を刺激し、自分のルーツの一端を形づくる。先の聖徳太子は一万円札の顔になったにもかかわらず、今では実は存在しなかったという見解が有力である。ダイエットという現代ならではの健康ブームと忍者の組み合わせを如何様にして魅せていくか…。忍者探求の旅は、もうしばらく続く。

イラスト・伊藤栄章